

外国人留学生の大学院における学習体験が 就職後のキャリア形成に与える影響 — 修了生を対象とした追跡調査 —

尹 得霞

東北大学大学院教育学研究科

要約

本稿は、東北大学大学院教育学研究科における外国人留学生の学習体験が就職後のキャリア形成にどのような影響を及ぼすのか、という問題意識に基づき、教育学研究科を修了後、日本または母国で社会人生活を送っている修了生を対象としたインタビュー調査を実施した。分析の結果、留学生にとっての大学院での学びは、「学びの態勢をつくる学び」、「日本の視点で考える学び」、および「社会化を促す学び」の3つの要素によって表される点が明らかとなった。また、大学院と社会人生活との連続性もまた大学院での学びの意義として捉えられる点が推察された。

キーワード：外国人留学生 学習体験 キャリア形成 質的分析

問題の所在

(1) 研究の背景

2008年に文部科学省は「留学生 30万人」を発表し、外国人留学生（以下、「留学生」と略記）招致計画を推進している。こうしたグローバル化や多文化社会化が進む社会の中で、日本の高等教育機関では「高度外国人材」と留学生を位置づけた上で積極的に留学生の受け入れを展開している。こうした留学生の増加に伴い、日本の大学や大学院を卒業・修了後、日本企業に就職するケースも増加している。表1は日本学生支援機構による留学生の出口調査（平成26～28年）を示している。

表1 H26年度～H28年度 留学生進路状況

	H28年度	H27年度	H26年度
修了者数	46,559	40,879	35,807
日本国内での就職者	14,493 (31.1%) ↑	12,325 (30.1%) ↑	9,678 (27.0%)
日本国内での進学者	14,268 (30.6%)	12,265 (30%)	10,263 (28.7%)
出身国での就職者	3,822 (8.2%)	3,470 (8.5%)	3,740 (10.4%)

(独)日本学生支援機構「外国人留学生進路状況・学位授与状況調査」より抜粋

この表に示される通り、日本の高等教育機関に留学している留学生の日本国内での就職率は近年増加傾向にある。こうした点に関し、土井（2009）は、『『高度外国人材』の役割を担う留学生を日本社会に送り出す大学としての役割が注目されつつある』とし、グローバル人材としての留学生の今後の活躍が期待されている点を指摘している。

しかしながら、大学や大学院を卒業・修了した留学生にとって、大学や大学院といった教育機関での学生生活から実社会での業務や職務を遂行する社会人生活へスムーズに移行することは、単なる生活環境や立場の変化に留まらない多くの課題を抱えることでもある（久野，2017）。それ故、今日の大学には、留学生の受け入れから社会へ送り出すまでの総合的なケアとしての、教育およびキャリア支援体制の充実が危急の課題として求められている。この点に関し、志甫(2012)は、「優秀な留学生の獲得を続けるためには、彼らの期待収益を高め卒業後の就職の機会を広げていく必要があり、そこに大学による支援の意義が存在する」と指摘している。こうした状況を背景とし、多くの大学で留学生のキャリア支援教育が積極的に取り入れられている。例えば、留学生のキャリア形成としての日本語教材の開発(渋谷，2017)、日本語・日本文化の授業を通じた留学生のキャリア支援実践（柳田,2010; 鈴木,2016; 西谷,2011)が挙げられる。一方、こうした留学生のキャリア支援に求められることとして、猪股他(2018)は以下の5点を示している。①留学生のキャリア選択志向の見極め、②日本語能力の向上支援、③日本独自の就職活動に関する理解促進、④留学生向け求人に関する情報や機会の提供、および⑤留学生向けの個別相談・指導。こうした留学生に対する総合性、多様性といった要素を含んで展開されるキャリア支援の充実は、今後、高等教育機関における重要な課題として位置づけられる。

(2) 問題意識および研究目的

これまで見てきたように、大学等の高等教育機関におけるキャリア支援教育は、ビジネス日本語の訓練や就職活動支援といった就職活動支援にも示されるように、総合性・多様性を含みながら展開されている。それ故、高等教育機関による差異も大きく、それぞれの高等教育機関によって、教育カリキュラム、キャリア支援教育プログラム、就職先領域・分野の特質、および就職活動特質は異なる。したがって、実際に当該大学・大学院を卒業・修了し、就職活動を体験し、日本あるいは母国の企業に就職し、現在進行形で実際の企業社会の中で自身のキャリア形成を果たしている人々の体験は、在籍する留学生にとって示唆に富む情報として有用であると考えられる。また、キャリア支援教育を推進する立場としての大学においても、修了生を対象としたキャリア支援教育に関する追跡調査により、留学生を対象としたキャリア支援教育の在り方の再検討と更なる充実を図る上で重要な示唆が得られると考えられる。そこで、本研究は、東北大学大学院教育学研究科における学習体験が就職後のキャリア形成にどのような影響を及ぼしているのか、その実態につい

て明らかにすることを問題意識として設定する。その上で、教育学研究科を修了し、日本国内及び母国で就職をした外国人留学生 7 名を対象とし、大学院での学習体験が就職後のキャリア形成にどのような影響を与えているのか、遡及的に体験を分析し、留学生を対象とした大学院教育の在り方について有用な情報提供を行うことを目的とする。調査は、在学時代の学びを遡及的に辿りつつ、現在の職務体験と重ね合わせる形でインタビュー調査を実施する。また母国で就職をした対象者に関してはインターネットでの映像インタビューにより調査を実施する。日本の大学院を修了後、日本あるいは母国での就業体験をもつ外国人留学生が大学院での学習体験を振り返ることにより、大学院時代に必要とされる学習内容、学習環境、指導環境等について、新たな視点からの提言が期待される。

方法

(1) 対象者

対象者の選定に関し、大学院での学びの体験記憶が鮮明であり、かつ企業での就業体験を一定程度体験している修了生を対象者として位置づけた。そのため、調査対象者は、入社 2 年目と 3 年目の留学生を中心とした。その結果、本研究の対象者は、教育学研究科を修了した中国人留学生 7 名であった。本研究の調査対象者 7 名のプロフィールを表 2 に示した。中国国内で就職している S さんに対しては、wechat による映像チャットを通してインタビュー調査を行った。他の 6 名の対象者に対しては対面形式でのインタビュー調査を実施した。

表 2 調査協力者のプロフィール

対象者	職種／企業	修了後勤務年数
S.G	日本語教師／中国・予備校	1 年
C.N	システムエンジニア／日本・IT 企業	1 年
Y.M	商品管理／日本商社	1 年
L.A	物流管理／日本・企業	2 年
D.I	総合職／日本・ゲームソフト制作会社	4 年
R.A	システムエンジニア／日本・IT 企業	4 年
H.G	システムエンジニア／日本・IT 企業	4 年

* 対象者のイニシャル表記は仮名。

(2) 研究方法

本研究は、東北大学大学院教育学研究科博士課程前期修了生の大学院での学びの体験および修了後の社会人体験の詳細について深く追究するために、調査対象者の体験の詳細な分析が可能な質的研究法を採用した。調査は、2018 年 10 月から 2019 年 1 月に実施した。

データ収集に関しては、半構造的インタビュー(semi-structured interview)を用い、深層的(in-depth)かつ自由回答的(open-ended)インタビューにより、1対1で実施した。データ分析に関しては、Patton(2002)に基づく質的データ分析法により実施した。具体的には、テキスト化された発話データを熟読し、発話の背後に潜む意味を読み解きながら、一つのまとまりをもつ意味内容要素(meaning units)に区分した。次に一つひとつの意味内容要素にそれぞれの内容を表す標題をつけ、全ての標題について、親和性の高い内容をもつものをサブカテゴリーとして再編成した。更に全てのサブカテゴリーを、より抽象度の高いまとまりをもったカテゴリーとして統合した。この一連の分析過程を、質的研究方法による分析経験を10年以上もつ複数の研究者で共有して実施することで、方法論的な信憑性が確保された。

結果および考察

分析の結果、86の意味要素が得られた。そこから以下に示す10つのサブカテゴリーが形成された。すなわち、「職能基盤としての基礎力の再認識」、「浸透した学ぶ姿勢」、「総合的な思考の習慣形成」、「他者との相互作用がもたらす教育力」、「思考訓練としての学習体験」、「異文化間葛藤を通じた日本理解」、「日本での組織社会化の習得」、「問題解決力の習得」、「社会人としての自己の再構築」、「長期的なキャリア形成」のサブカテゴリーである。これらは最終的に以下の3つのカテゴリーに集約された。すなわち、「学びの態勢をつくる学び」、「日本の視点で考える学び」、および「社会化を促す学び」である。表3にカテゴリーおよびサブカテゴリーの一覧を示した。

表3 カテゴリーおよびサブカテゴリー一覧

カテゴリー	サブカテゴリー
学びの態勢をつくる学び	職能基盤としての基礎力の再認識
	浸透した学ぶ姿勢
	総合的な思考の習慣形成
	他者との相互作用がもたらす教育力
日本の視点で考える学び	思考訓練としての学習体験
	異文化間葛藤を通じた日本理解
社会化を促す学び	日本での組織社会化の習得
	問題解決力の習得
	社会人としての自己の再構築
	長期的なキャリア形成

以下、カテゴリーごとの詳細について、対象者による発話に触れながらみていきたい。

(1) 学びの態勢をつくる学び

このカテゴリーは、「職能基盤としての基礎力の再認識」、「浸透した学ぶ姿勢」、「総合的な思考の習慣形成」、「他者との相互作用がもたらす教育力」の4つのサブカテゴリーから形成されており、社会人として業務に従事する中で大学院時代の学びを振り返って初めて気づく、基盤となる力の学びについて説明するカテゴリーとして形成された。全ての対象者が、理解力、思考習慣、自律的に取り組む姿勢、対話力、といった、問題解決に向かうための学びの姿勢あるいは行動態勢を学んでいたことを再認識している。それらは、大学院で学んでいた当時は気づかずにいたが、社会人になってからその重要性について再認識する形で語られていた。その点は、「総合的能力は高められた」「知らない間に感化された」「習慣が作られた」「力が伸びた」「鍛えられた」といった言葉に端的に示されている。ある対象者による下記の発話に注目したい。

「大学院の時、レポート課題や修士論文の作成を通して論理的に物事を考える習慣が得られ、それが今の自分のためになっています」。(L.A)

このように、即効性を持つ実践力というよりもむしろ、社会人になってから学んでいく上での姿勢や物の見方、考え方を学んだ実感が多くの対象者によって語られている。こうした基盤形成という点での学びが、留学生における大学院での学びの第1の要素として考えられる。

(2) 日本の視点で考える学び

このカテゴリーは、「思考訓練としての学習体験」、「異文化間葛藤を通じた日本理解」の2つのサブカテゴリーから形成されており、日本に留学して大学院で学ぶ中で、専門領域の知識・技能のみならず、日本の文化社会的な視点からのもの見方考え方についても学んだ経験が、日本での社会人生活において重要な意味を持つ点について説明するカテゴリーとして形成された。全ての対象者が、他の日本人学生との研究交流や教員とのディスカッションを通して、日本の視点を意識することと同時に、外国人留学生として日本とは異なる視点をもつ自身の視点をもって学んでいたことを振り返り、そうした多様な視点をもって問題解決に向かう姿勢や学び続けることの意味や意義を再認識している。ある対象者の次の発話に注目したい。

「留学生としてゼミに参加することは、教授や周りの日本人学生たちに留学生としての考え方や視点が期待されているんですね。そう感じました」。(S.G)

「留学生としての見解は非常に新鮮に受けとめられました」。(D.I)

「研究室の皆さんとのディスカッションは拡散的な思考の訓練になりました」。(Y.N)

このように、日本に留学している意味の一つを、日本的な視点での発想と外国人留学生としての自身の視点からの発想の融合に見出し、それを自身の強みとして再認識することで、社会人生活の中での様々な問題解決に向けた原動力として機能させている点が見て取れる。こうした日本の視点で考える意義が、留学生における大学院での学びの第2の要素として考えられる。

(3) 社会化を促す学び

このカテゴリーは、「日本での組織社会化の習得」、「問題解決力の習得」、「社会人としての自己の再構築」、「長期的なキャリア形成」の4つのサブカテゴリーから形成されており、企業という組織に社会化する過程において大学院で学んだ体験が重要な意味を持つ点についての再認識を説明するものとして形成された。全ての対象者が、社会人生活を送るようになった後に大学院での学びを振り返った時、専門領域の学術的な知識・技能・方法論といった言わば明示的な学問的学びの成果を認識すると同時に、そうした明示的な形では立ち現れない、社会人としてのキャリアにつながる意識や行動態勢の暗示的な学びの重要性について言及している。その背後には、社会人としての立場に立って初めて気づく大学院での学びの潜在的な展開性、発展性、可変性、継続性といった意義への価値づけが存在していると考えられる。すなわち、大学院修了後、社会人としてのキャリアにつながる意識形成が大学院での学びの中に埋め込まれており、それが日本での組織社会化や長期的なキャリア形成に大きな影響を与えている点が推察される。ある対象者はこの点について下記のように語っている。

「難しいところは、学生の立場から社会人としての立場へ移転することかな。特に、考え方ですね、学生の考え方からすぐ社会人の考え方に変換しなければなりません」。(H.G)

「留学生にとっては、できるだけ大学院の研究環境を通して、大学院以外の世界に延長し視野を広げたらいいですね」。(D.I)

「自分のキャリア設計意識はいつでも持つべきだと思います。自分の仕事の本質と将来の見通しをいつでもきちんと把握すべきです。大学院でそうした意識を学びました」。(R.A)

このように、日本に留学して大学院で学ぶことの第一義的な意味は当該専門領域の専門

性を高めることにあるものの、大学院を修了した後のキャリアに連続性を持たせた形での学びの意義も重要な意味をもって捉えられている。それは、日本での社会人生活を視野に入れたキャリア形成であり、就職した後の企業社会の中でのキャリア形成であり、生涯に渡る長期的なキャリア形成でもある。こうした大学院と社会人生活との連続性が、留学生における大学院での学びの第3の要素として考えられる。

結語

本研究では、東北大学大学院教育学研究科における留学生の学習体験が就職後のキャリア形成にどのような影響を及ぼしているのか、その実態について明らかにすることを問題意識として設定した。その上で、教育学研究科を修了し日本国内及び母国で就職をした外国人留学生を対象とした遡及的インタビューにより、大学院での学びの体験を振り返って認識する大学院教育の意義について明らかにすることを目的とした。インタビュー調査の結果、留学生にとっての大学院での学びは、「学びの態勢をつくる学び」、「日本の視点で考える学び」、および「社会化を促す学び」の3つのカテゴリーによって表される点が明らかとなった。そこでは、即効性を持つ実践力というよりもむしろ、社会人になってから学んでいく上での姿勢や物の見方、考え方を学んだ実感によって、生涯に渡って学び続ける基盤形成がなされている点がまず確認された。また、日本的な視点での発想と外国人留学生としての自身の視点からの発想の融合に見出し、それを自身の強みとして再認識することで、社会人生活の中での様々な問題解決に向けた原動力として機能させている点も確認された。更に、大学院を修了した後のキャリアに連続性を持たせた形での学びの意義も重要な意味をもって捉えられていた。それは、日本での社会人生活を視野に入れたキャリア形成であり、就職した後の企業社会の中でのキャリア形成であり、生涯に渡る長期的なキャリア形成でもあった。こうした大学院と社会人生活との連続性もまた大学院での学びの意義として再認識された点が確認された。

今後の課題

本研究では、大学院での学びの体験記憶が鮮明であり、かつ企業での就業体験を一定程度体験している修了生を対象者として位置づけたため、入社2年目と3年目の留学生を中心とした調査を実施した。今後は、より長期の就業体験をもつ修了生や、多様な国の出身留学生といった対象者に対する調査を継続して実施し、東北大学大学院教育学研究科での学びが留学生の生涯キャリア形成に対する影響を検討し、留学生のためのキャリア支援教育の更なる充実に寄与したいと考える。

参考文献

土井 康裕(2009)「留学生就職支援プロジェクト 調査報告--「留学生採用に関するアンケート

- ート)、名古屋大学留学生センター紀要 / 名古屋大学留学生センター(7)、pp.13-20.
- 久野弓枝(2017)「中国人留学生のキャリア形成に関するライフストーリー研究」、札幌大学総合論叢第44号、pp.61-71.
- 志甫啓(2012)「外国人留学生の日本における就職・採用の動向と大学による支援の意義」、関西学院大学高等教育研2号、pp.15-33.
- 猪股歳之・高橋修・富田京子(2018)「東北大学キャリア支援センターにおける留学生キャリア支援の現状と課題(特集 多様化・複雑化する学生支援の現代的課題)」、東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要(4)、pp.73-79.
- 中井陽子・菅長理恵・渋谷博子(2018)「先輩留学生の体験談を読む活動の実践研究:ーキャリア形成支援教育をめざしてー」日本語教育方法研究会誌24(2)、pp.90-91.
- Patton M.Q.2002 *Qualitative evaluation and research methods*(3rd ed.).Newbury Park, CA:Sage.
- 鈴木華子(2016)「日本語授業を活用した留学生キャリア支援:文化統合的キャリア支援プログラムの開発と実践」筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集31、pp.147-158.
- 西谷まり(2011)「留学生のキャリア支援:全学共通教育科目『日本事情I』における役割」一橋大学国際教育センター紀要2、pp.133-140.
- 柳田直美(2010)「キャリアデザインの視点を取り入れた授業活動ー『日本語演習II』の実践報告」筑波大学留学センター日本語教育論集25、pp.155-166.

謝辞

本研究は、東北大学大学院教育学研究科、先端教育研究実践センタープロジェクト研究助成による。記して謝意を表したい。